

# 屏風に描かれた書画展

2017年4月8日[土] ▶ 5月21日[日]

【会場】大垣市郷土館1階 郷土美術室  
 【休館日】毎週火曜日、5/1(月)、5/8(月)  
 【開館時間】9:00~17:00(入場は16:30まで)  
 【入館料】一般100円、高校生以下無料  
 【主催】公益財団法人 大垣市文化事業団  
 (大垣市定管理事業)

## 大橋翠石 1865~1945 「猛虎図六曲金屏風」大垣市指定文化財

幕末の動乱期に、大垣の北新(現在の新町)に染物屋を営む大橋亀三郎の次男として生まれる。

父は、家業のかたわら絵を好み、清の画家胡公寿の門人、朱印然を家に留めて画を学ぶほどであった。この父の影響で、翠石は幼い頃から絵を好んだ。

本作は11代藩主氏共の三女、米子の婚礼に際して、家老戸田鋭之助の依頼により、明治39年(1906)に描かれたもの。氏共家への贈答用と鋭之助の自家用に二双制作のうち、本作は後者に該当する。

気品を備える整った肢体や、胡粉や金泥を駆使して描かれた毛描きの水準は他の作品と一線を画している。日本画家有数の写生技術を誇った翠石が、文字通り生を写しきった屈指の傑作である。

## 大野百錬 1864~1941 「詩書五絶」

大垣藩士大野十助の次男に生まれる。本名鉄之助。

藩校の儒学者野村藤陰に師事し漢書を、菱田海鷗に漢詩を、前田元敏に英語を学ぶ。14歳で大垣小学校(興文小)の助教を勤めた。20歳のころ、岐阜県尋常師範学校、大垣尋常中学校で漢文と書道の教師として教壇に立ち、24年間にわたって郷土の子弟の教育にたずさわった。その後、漢詩人、木蘇岐山として毎日詩壇(大阪毎日)で活躍。

大正8年(1919)大垣中学退職後、書家として活躍。百錬の絶妙な筆跡は、当時並ぶもの無しといわれ、書道会のリーダーとしての活動はめざましいものがあつた。さらに帝国書道院の設立と大日本書道作振会を設立。日本代表として、中国視察に出かけ「日満支親善書道展」で審査員を務める等活躍する。

仮名を能くし、門人に藝術院会員の日比野五鳳はじめ、百錬の影響を受けたものは数知れない。

## 窪田華堂 1921~2004 「葛生桂雨 琵琶歌 千本松」

揖斐郡揖斐川町に生まれる。本名は一郎。

35歳の時、日展に初出品し入選。42歳までに4回入選、以後健康を損ねて出品はしていない。昭和41年(1966)清雅会を設立、毎年一回書作展を開くとともに、昭和56年(1981)、大垣市文化連盟設立に参画した。64歳の時、大垣市文化会館広場に「文房至宝碑」を建立。翌年大垣美術家協会理事長に就任。平成5年(1993)大垣市功労者表彰、平成8年(1996)大垣市文化連盟功労賞を受賞、平成12年(2000)中部日本書道会名誉顧問となる。市展の審査員としても活躍。平成16年(2004)多くの市民から惜しまれつつ大垣市で逝去。

(注) 古来より文房具の中でも特に硯・筆・墨・紙を文房四宝といい、四宝以外の硯屏・水滴・文鎮・筆架・墨台・印材などの文房具も同様に世に尊ばれ大切にされてきた。華堂は、それらを総称する名称として「至宝」の言葉を考案した。

## 林 杭川 1915~2003 「濃尾震災之図」

不破郡赤坂町(現大垣市赤坂町)に生まれる。本名は慶司。

22歳で上京、川端画学校及び滴水院画塾で日本画を学ぶ。32歳の時、不破郡赤坂町議会議員となる。35歳の頃、温故焼の廃絶を憂い、四代清水温故氏に入門。以後作陶に励み温故焼保存会を設立、その研究保存に努めた。52歳の時、大垣市と赤坂町の合併により、大垣市議会議員となる。その後「第1回岐阜県伝統工芸品展」(岐阜高島屋)や「温故焼展」(大垣市民会館)「濃飛の焼物展」(愛知県陶磁資料館)等に出品。平成2年(1990)「大垣市重要無形文化財技術保持者」として認定されるとともに平成5年(1993)、勲五等双光旭日章を受賞。

郷土をこよなく愛した杭川は自らの号も杭瀬川からとった「杭川」を使用、ふるさとゆかりの絵画も描いている。

## 藤井介石 「関ヶ原合戦図屏風」

不破郡関ヶ原町に生まれる。大正時代に活躍した絵師。この屏風は、地元出身絵師だけあって地理的にも正確という評価を得ている。本図では、寝返った小早川軍が、松尾山から大谷吉継勢に突進する姿が描かれている。まさに雌雄を決する契機であった。

## 〔複製写真〕 「関ヶ原合戦図屏風 (井伊家本)」

井伊家本の関ヶ原合戦図屏風も、資料価値の高い屏風として知られている。この屏風では中央に井伊家の赤備えの武者たちが大きく描かれている。江戸時代後期に井伊家の依頼で狩野派の絵師が描いたものだが、正確な武将の配置と評されている。